読売俳壇

矢島渚男 選

あのことはあれでよかった鳥雲に　東京都　中島　徒雁

【評】誰にもこんな時があるもの。その気持ちを正直に表現して、季語の選択が巧みである。鳥たちが北へ去って行くように。

闇に舞ふ火の粉へ手上げお水取り　三木市　阿南不二枝

【評】二月堂の松明の火の粉を浴びようと手を挙げているさま。私は昔壺法師として有名な管長さんから内陣での見物に誘われたのに行けなかった残念な思い出がある。

春寒し誰も帰りて来ぬ故郷　北名古屋市　月城　龍二

【評】ユーターンのことか、単に帰省のことか、不明だが、同級生のことであろう。田舎には就職が難しいという事情か。現代がかかえる課題だ。

戸締りはせず春月の丸ければ　熊谷市　田島　良生

春もはや遠し北方領土の日　越谷市　安居院半樹

この先に梟の棲む昼の森　明石市　北前　波塔

料峭や青磁の壺の流離譚　羽村市　竹田　元子

春めくや通学生のイヤリング　和歌山県　浦　貴子

春寒し空き家となりし両隣　長野県　村田　実

春の雪雷までもともなへり　川口市　広田　絹子

高野ムツオ 選

鶴引くや人には見えぬ空の道　川口市　清正　風葉

【評】北帰行する鳥は多いが、飛ぶ姿の美しさなら鶴が屈指。鶴にしか見えない一筋の道が空にはあって、今年もその細道を辿り帰っていく。

石垣の根石のごとく春睡し　香芝市　山本　合一

【評】大袈裟と言えば大袈裟だが、石垣の重さを一身に受け止めるぐらい眠いなんて、よっぽど眠いに違いない。それでも眼をつむるわけにはいかない。先生の一喝が飛んでくる。

春炬燵指を折りても中八音　宮崎市　柏田　憲一

【評】うまくできたとにんまり。だが待てよ、どこかリズムが緩い。指折るとやっぱり中七が一音多い。春炬燵の中では、たぶん名句は生まれない。

蕗味噌や母を語ればきりもなし　川崎市　西　順子

縄とびの縄の引き寄す春の雲　東大和市　神山　文子

囀れることよ分けてもこの頭上　南九州市　日笠こうじ

春暁やまづ俳壇に眼を通す　東大阪市　渡辺美智子

ヘルメット中を覗けば蕗の薹　さいたま市　鈴木　栄一

朧の夜誰も帰らぬ門灯す　久喜市　深沢ふさ江

石鹸玉壊れる前に割る亡き子　筑紫野市　二宮　正博

正木ゆう子 選

丸竹夷春めく京の童歌　枚方市　定井　節子

【評】京都の町の通りは碁盤の目のよう。その頭文字を連ねた童歌がある。丸は丸太町通、竹は竹屋町通、夷は夷川通。覚えると場所が特定できるとあって、今も現役の童歌。

CDの緑光冬の川底に　富士市　海野　道明

【評】何が光っているのだろうとよく見ると、水底にあるのはなんとCD。あれは確かによく光りそう。「緑」と色を特定して、印象的。

日脚伸ぶどんぶり坂の底にても　東京都　金子　武夫

【評】そんな坂があるらしいが、知らずとも想像できる。どちらからも下った底なのだ。どんぶりの語感も懐かしく、丼の漢字まで目に浮かぶ。

MRIの筒抜け出して聞く初音　芦屋市　田中　俊

寝たふりの夫跨ぎいざ春の野へ　松原市　古沢　昌代

春の蠅座布団の隅はい上がり　大津市　西岡　信夫

一輪を挿して似合ふもの侘助　熊本県　田上　都

鹿の角回し見もする薬喰　宝塚市　広田　祝世

初蝶のまだ湿りゐてとどまれり　座間市　戸田　順章

ネクタイを頬に打たせし春一番　東京都　本多　明子

小澤　實 選

母わたし叔母もふくよか桜もち　東久留米市　福西　りん

【評】母もわたしも叔母もふくよかということは、遺伝によるものだろう。桜餅は痩せたひとが食べているよりも、ふくよかなひとが食べているほうが、おいしそうだ。

凸凹の地は凸凹に下萌ゆる　高槻市　村松　譲

【評】最初の凸凹は土地の起伏を示し、次にあらわれる凸凹は草の生え具合を示す。この場合、リフレインが有効に用いられている。

ユーミンの突き抜けし声春の朝　太田市　阪本　和夫

【評】松任谷由実さん、ユーミンの歌声を「突き抜けし」と表現しているのは、適切であると思う。春の朝の明るい気分も感じられる。

着ぶくれてスマホ講座の老い六人　熊谷市　小林　幸子

花冷えの水上バスの水しぶき　高槻市　黒田　豊子

木の芽味噌ふふみ大吟醸ふふみ　名古屋市　可知　豊親

春寒や水ぶちまけて競り終はる　北本市　萩原　行博

軽々と腿まで子猫登り来る　新潟市　古泉　浩子

初午や屋敷祠に缶コーヒー　海老名市　山田　山人

はひはひの摑まり立つよ雛の段　川越市　益子さとし

枝しおり折

土井探花句集『地球酔』　兜太現代俳句新人賞受賞者の第1句集。2019年以降の作品を中心に、299句を収録する。地球に生まれた誰もが日常で感じる孤独を、平易な言葉で客観的に見つめる。〈どうでもよいひととけつこうよい花火〉

（現代俳句協会、2200円）

渡英子歌集『しづかな街』　「短歌人」同人の第5歌集。歌集名はコロナが蔓延する直前に訪れた北スペインの街の風景を詠んだ歌から取ったという。〈レプリカの壁画への道に冬陽差しゲルニカは静か、しづかな街だ〉（本阿弥書店、3080円）

富田豊子歌集『臥龍梅』　熊本で活動してきたベテランの第6歌集。熊本地震のほか、老境の日々を静かに詠んだ歌を収めた。〈網繕ふ老いたる漁夫よ波止に居て風のことばを聴いてゐるのか〉

（砂子屋書房、3300円）

◆第41回兜太現代俳句新人賞＝楠本奇蹄「触るる眼」（50句）

題字デザイン・イラスト　福田美蘭